

# 緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

いよいよ開始! チコロナイ ..... P 2  
黄土高原の印象 ..... P 6



貝澤正さんの遺志をついでナショナル・トラストによる森林回復の運動がはじまる。

1994・12

32

いよいよ開始！

ナショナル・トラスト運動

# チコロナイ

(アイヌ・シサム友好の森)

一昨年の末、GENの討論会で石原忠一さんから、“北海道において、先住民であるアイヌ民族と協力して森林回復の活動をはじめようか”と提起されました。

去年は、国連の『国際先住民年』、そして今年12月10日からは『世界の先住民の国際10年』が始まります。

私たちは石原さんの提起を受けて、学習、調査、アイヌ民族の方がたや協力団体の人びとなどのネットワークづくりを続けてきました。そして、いよいよ12月10日を期して、『チコロナイ』の運動を開始します。

チコロナイとはアイヌ語で、“私たちの沢”という意味です。昔、アイヌ民族の人びとが、沢すじを中心に森の恵みをうけて生活していた地域を表しています。

約500年前、私たちの祖先である“和人”が交易を求めてアイヌ民族の暮らす“アイヌモシリ”に入ってから、江戸時代、明治時代と、資源の略奪、差別、抑圧が続きます。その過程でアイヌモシリの自然と人び



との生活が破壊されてしまいます。それが現在もなお続いていることは、“日本国”の法律として『北海道旧土人保護法』が存在していることや、二風谷ダムの問題でもよくわかります。私たちはこのような歴史をふまえたうえで、今からどうしていくのかを模索し、森林回復という活動とおして、アイヌ民族の人びとと新たな関係を築き上げていくことをめざします。

ナショナル・トラストの方法で山林を買い取り、『チコロナイ』としての自然を回復し、アイヌ民族の伝統文化の回復と伝承に寄与するとともに、その自然と調和した“アイヌプリ(生活の仕方)”を謙虚に学び、“人間本来の真に豊かな生活”を考え直していく契機にしていきたいと思っています。今年の8月にはこのような活動のひとつとして第1回目の“ワーキングツアー”が行われました。左下の写真はそのときの木彫り体験の様子です。

第1期計画として来年3月までに、少なくとも300万円以上の寄付金を集めて、平取町二風谷の周辺で山林買い取りをはじめます。故貝澤正氏(表紙写真)が生前にご自分でも山林を育て、ナショナル・トラストを提唱した所です。正氏の遺志をついで頑張っている貝澤耕一さんと協力してやっていきます。二風谷の周辺にはまだ一部自然の林が残っていますが、尾根を一步



自然の雑木林も失われつつある

越えると大手企業の利潤追求のために無残な姿になっています。一日も早い“買い取り”が望まれます。

緑の地球ネットワークの活動の一環として、少なくとも『先住民の国際10年』の間は続けていきたい、その間に基盤を整えて、将来は財団法人として発展させていきたいと思っています。積極的な参加と協力を呼びかけます。

貝澤正氏の『アイヌわが人生』(岩波書店)に、森林回復への想いとナショナル・トラストの夢が語られています。ぜひお読みください。



すっかり木を伐られてしまった山

## すべての生物のために

貝澤 耕一

大自然の北海道と言われていますが、本当に大自然なのでしょう。見廻し、はてしなくつづく草原、それは北海道の自然ではありません。密林におおわれていたこの地、アイヌ民族の最後の天地を今日まで五百数十年にわたり、侵略、略奪、破壊してきた姿なのです。

そのために生態系がこわれ、きれい

な小川に住むザリガニなどもさがしまわってもなかなか会うことができないのです。また、鹿、熊の生活の場をうばい、しかたなく里にえさを求める彼ら、今に、私たち人間の住む所を失う日も近いことでしょう。

そんな地球をみなさんは望んではいないでしょう。たしかに一人一人の力は小さい、でも、その力を合わせると大きな力になるはず。その力でこれから生まれてくる子どもたちが、生

きていける日本にすることが私たちの責任のほうです。

もともとアイヌモシリは密林におおわれていて、山菜の多くとれる、小川を中心とした生活ではなかったかとおもわれます。つまりどこでも森だったのです。

そんな、人間もふくめたすべての生物が生きていける森をちっちゃなところからでも育ててはみませんか！

『すべての生物のために』



## 会員拡大にご協力ください

『環境問題』ととりくむ市民の動きとして、『環境NGO』は急速に世間の認知を得つつあります。各種のメディアをつうじて、さまざまな情報が伝えられています。NGOの増加につれて活動の種類、参加の形態も広がってきました。それなのに。

「環境問題に関心はあるんだけど、どうしたらいいのかわからなくて」とか、「何かやってみたいんだけど、環境団体ってヒステリックじゃない？」あるいは、「お金も時間も無いし、どうせたいしたことできないから」私た

ちがよく耳にする言葉です。みなさんのまわりのそんな方に、教えてあげてください。

「どうしたらいいの……」簡単です。GENに参加してください。会報の購読からでもけっこうです（会員になっていただけたら嬉しいのですが）。そうすれば、決して「ヒステリック」な団体ではないことは十分わかっていただけるでしょう。「なにもできない」？ とんでもない。使用済テレカで何ができるか、会報をお読みのみなさんにはよくわかりですよ。

『自然と親しむ会』や講演会、ワーキングツアー、会報の発行などで、GENもみなさんのご協力に精一杯フィードバックしていくつもりです。広がる活動を支える、より安定した基盤を築くためにも、会員の拡大にご協力くださるようお願いいたします。

なお、先月お送りしましたリーフレットの追加をご希望の方は、事務局までご連絡ください。

## 第2回会員総会のおしらせ

緑の地球ネットワークの第2回会員総会を下記要領により開催いたします。準備会の活動から3年、正式発足から2年、ネットワークはさまざまな困難をかかえながらも、着実に前進してきたと思います。

このような活動は、はじめること以上に、つづけることがたいへんだと実感しています。その意味でいま、これまでの3年間をふりかえり、今後の前進の基礎を固めるこの第2回総会は、とてもたいせつだと思います。

当初は記念講演なども考えたのですが、いま「NGO」自身が大きなテーマになっていることを考え、私たちの

経験を率直に語りあうことを中心におくことになりました。

各地へのワーキングツアー、自然と親しむ会、そのほかGENの活動に参加しての思いを、みなさんに持ち寄っていただきたいと思います。

また第2期の担い手＝世話人を生み出すことは、この総会の重要な課題だと思います。よし、自分もその一翼を担ってやろう！と思われるかたは、ぜひ事務所までご連絡をお願いいたします。

日時 1995年2月18日（土）

午後1時～5時

会場 クレオ大阪西

（JR大阪環状線「西九条」）

【日程】（案）

13:00 ビデオ「黄土高原に緑を！」

13:30 討論「緑の地球と私たち」

15:30 第2回会員総会

17:00 終了

募集！

討論「緑の地球と私たち」（仮題）の参加者を募集します。人数は4～5人。ワーキングツアーに参加した方、講演会によく参加する方、会報の読者など、それぞれの立場からNGOへの思いや関わり方を5分程度話していただき、会場も交えた討論につなげていきたいと考えています。この機会にぜひ日頃の思いを語ってみたい、という方、まず事務所までお電話ください。

## 1995春の黄土高原ワーキングツアー参加者募集

中国黄土高原でしっかり汗を流して木を植えたい人には見逃せない'95春のワーキングツアー。農村の人びとの暮らしにふれ、小学校付属果樹園で植樹に参加するなど、忘れられない体験になることでしょう。

学校の春休みにあわせて第1組と、滞在期間を短めに設定した第2組。ご都合のよい方に、ぜひご参加ください。

日程

1. 3月26日（日）～4月4日（火）

2. 4月7日（金）～4月14日（金）

関西新空港発着。

費用

どちらも21万円（航空運賃、中国での宿泊費／食費／交通費、ビザ取得手数料、GENの会費1年分を含む。学生割引あり）。飛行機便のつごうなどで日程その他に変更のある場合があります。

GENのワーキングツアーならではの体験がいっぱい。参加資格はとくにありません。健康に自信のある方ならどなたでも歓迎！



# 子どもたちからのたより

## ～大きく育て、小学校付属果樹園

緑の地球ネットワークの大同事務所から、付属果樹園を作った小学校の子どもたちが書いた絵と手紙が送られてきました。全部をお見せできないのが残念ですが、一部をここでご紹介します。

孟令艶（豊丘県下寨北小学校4年）

日本のおじさん、おばさん。

こんにちわ。みなさんはことしの春私たちの村にきて、リンゴなどくだもの木をいっしょに植えてくださいました。とてもうれしく思っています。

みなさんはそのあとも私たちに関心を寄せてくださって、鉛筆、消しゴム、ボールペンなどの学用品やくだものなどを持ってきてくださいました。先生からそれらのものを受け取り、私はたいへんうれしく思っています。

あなたたちがお金をだしてくださったので、私たちの新しい学校が建ちました。みなさんが私たちのことをほんとうによく考えてくださっていることがわかります。

私は、いい成績をとって、みなさんにお応えしたいと思います。かならずよく勉強して、みなさんを失望させることのないようにします。将来は祖国に貢献し、また中日関係がずっと友好的であるようにしたいと願っています。日本のお友だちの学習が進歩するよう願っています。

おじさん、おばさんたちが健康で、お仕事がうまくいき、ご一家が幸福であるようねがいます。敬礼！

宋秀蘭（下寨北小学校4年）

日本のおじさん、おばさん。こんにちわ。

みなさんはことしの4月1日、私たちの学校にきて、私たちといっしょにくだもの木を植えてくださいました。ほんとうにごくろうさまでした。

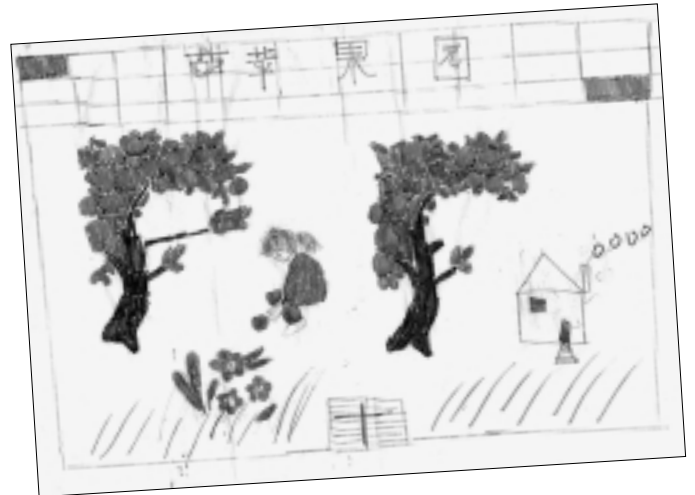
そのうえに、鉛筆、消しゴム、サインペンなどの学用品と果物、おかし、それからシャープペン、本、風船、下敷きなどを届けて、私たちに関心をよせてくださいました。

またみなさんのご協力で、新しい希望小学校が建ち、私たちはとても感謝

しております。

私たちはよく勉強して、将来は4つの現代化に貢献できる人間になりたいと思います。

最後に、みなさんが健康で、愉快地に生活され、おしごとが順調に発展するよう祈ります。



曹代霞（三山小学校4年）

日本のお客さんがこられてから

土曜日の午後、日本からのお客さんが私たちの三山小学校を参観にこられた。

彼らはこんなに遠い道のりをなんとも思わず、私たちの小学校にきてくれたのだ。彼らは私たちの教室を参観し、私たちの机や椅子がみな自分の家からもってきたもので、まちまちの高さであることを見て、勉強の条件がたいへんよくないことを知ってくれた。そして私たちの学校に援助の手を差し延べ、私たちの学校に付属果樹園をつくることを決めてくれた。実がなるようになれば、お

金に換えて、私たちの学校のために使い、困難な勉強の条件を改善することができる。そのうえに、彼らは鉛筆、本などの学習用品も届けてくれた。

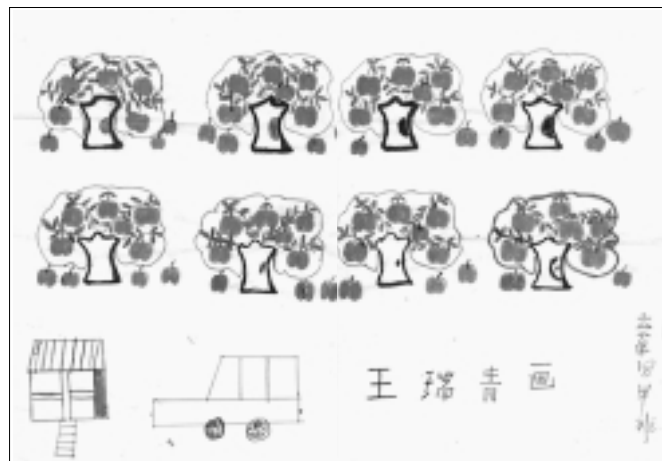
私たちはこの話をきいて、とても感動した。私は思う。よその国の人が、私たちにたいしてこのように熱情的に助けてくれることにたいして、私たちはどのような方法で感謝を表したらいいのだろうか？ 私はかならずよく勉強し、将来は大学にも上がり、日本のおじさんたちのように、ほかの人を助ける人間になろうと思う。

王臨充（三山小学校4年）

9月のある土曜日の午後、私たちは

興奮しながら、日本のお客さんがくるのを待った。

勉強をしていると、2台の自動車が学校にやってきて、日本のお客さんが通訳、校長、先生たちと笑いながら





話しているのが見えた。そのあと私たちの教室にやってきて、山間の貧困な村の学校の勉強条件が非常に劣っているのをみられた。机や椅子は家から運んできたものであり、高いものもあれば低いものもある。日本のお客さんは、私たちの学校の勉強条件を改善し、私たちを有用な人材に育てるために、たくさんの資金を提供し、三山小学校に付属果樹園をつくってくれる、ということだ。

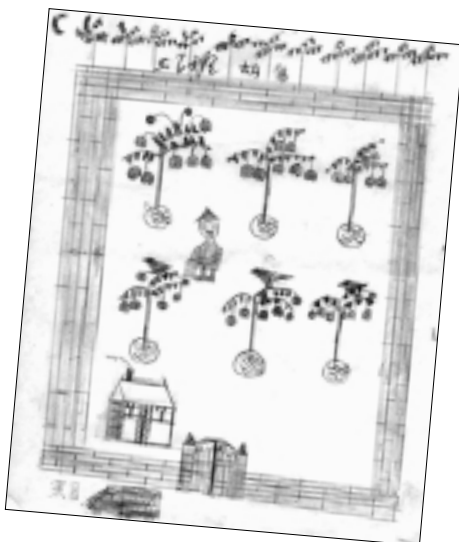
日本のおじさん、おばさんたちが、私たちに関心と支持をよせてくれることを、私はたいへんありがたいことだと思う。彼らは、私たちが科学文化知識を掌握し、大きくなってから国家のために貢献できるよう、遠く離れていることをなんとも思わず、この小さな村までやってきてくれたのだ。私はかならずよく勉強し、日本の人たちの私たちにたいする期待を裏切らないようにしたい。

王彦輝（三山小学校5年）

### 愛の心

数日前の午後、日本の緑の地球ネットワークのおじさんたちが、県の青年団の指導者に伴われて私たちの学校にこられたので、学校や村の指導者と一っしょに私たちも熱烈に歓迎した。

そのとき日本のお客さんたちは、わざわざ日本から学習用品をもってきてくれた。私は心から感謝している。たったひとこと「謝謝」だけでもいいか



ら日本語を勉強し、その思いを伝えたいと思う。

私は苦勞を恐れず努力し、よく勉強し、日本の友人たちが私たちに送ってくれた「愛の心」に応えたいと思う。

今回、彼らは、私たちの三山小学校に付属果樹園を建設する資金を提供してくれることになった。収益があがるようになれば、この小学校の面貌は一新されることだろう。

私は想像する。果樹園を建設すれば、数年もすれば荒れ山が“花果山”に変わり、果樹がさかんに茂り、四季いつも新鮮な果物が絶えなくなる。学校は平屋から、高いビルになり、周囲を花園に囲まれ、いつもいい香りに包まれ、バスケットボールのコートやプールができ、学校のようにすはまったく変わってしまう。同級生たちもよく勉強し、しだいに成績がよくなる。これはみな日本の友人が私たちを助けてくれたからだ！

彼らの支持と「愛の心」の激励のもとで、私は一生懸命勉強し、将来はかならず日本に留学し、友誼の橋をかけるエンジニアになろう。両国人民の友誼を強めるために貢献しよう。いつまでも友好的であろう - これこそ私たち中日両国人民の共通の願いなのだ。

劉玉先（三山小学校3年）

### 日本の友人に感謝する

あの土曜日の午後、日本の友人が私たちの教室に来るなんて、私はそれまで思ってもいませんでした。

私たちはいつものように教室で静かに先生の話聞いていました。

日本の友人たちは軽やかに教室に入ってきました。私たちはみな一言も話をしないで、日本の友人たちを見ました。日本の友人は片方で先生と握手をしながら、もう片方で私たちに「小朋友們好！」（小さなお友だち、こんにちわ）と言いました。

彼らは教室の後ろのほうに行き、黒板に書いてある「学習園地」をみ、そ



れからまたほかをみたりしていました。そのあと、日本の友人は私のそばにきて、私がみている教科書を読み、また前のほうに歩いていきました。そしてカメラで写真をとったり、ビデオをとったりしたのです。

先生が私たちに教えてくれました。「日本の友人たちは私たちの村に小学校付属の果樹園をつくってくれ、苗木代も肥料代もみんな日本の友人がだしてくれる」というのです。時期がきて果樹がとれるようになると、収入のお金はみんな学校にくれるのです。勉強の道具を増やすこともできますし、プールや体育場、図書室などをつくったり、教室をもっときれいにすることもできます。私たちは日本の友人たちにほんとうに感謝しています。

# 黄土高原の印象

前中 久行（名城大学農学部）

1994年の8月にGENのお誘いに応じて、山西省の渾源県を訪れた。隣接した内蒙古の砂漠で調査をしたことがあり、機会があれば周辺のより雨量が多い恵まれた地域の植生や農業を見たいと思っていたが、やはり百聞は一見にしかずで、色々なことを見聞きし考えさせられた1週間だった。「緑化」に関心をもつ多くの人たちが現地を訪れ、理解を深めてほしいと思う。その際の道案内として、旅行中に考えていたことを、そのままの形で羅列させていただく。



手前のハゲ山から、見渡す限り畑がづく

大同郊外の農村、トウモロコシ、コウリヤン、キビ、アワ、ヒマワリなどの農地が延々と続く、所々にポプラの並木が見られる程度で、樹木はほとんど無い。渾源県へ入るために越える山は一面のハゲ山である。景色としては、確かに荒涼としている。「この景色をどのように見るか？自然破壊というのは簡単だが！」この問いが、中国滞在中ひんばんに私の頭をよぎる。しかし、いまだ答えられないでいる。

まず、沙漠と沙漠化は別のものである。沙漠とは、降水量よりも蒸発量が多い地域で、植物が生育できない土地のことをいう。沙漠化とは、沙漠の周辺の半乾燥地で元来は植物が生育可能な地域であったけれども、人間の誤った土地利用のために生産力が失われてしまった土地をいう。誤った土地利用の例として、過剰な森林伐採や、過剰な家畜の放牧、不適地での農耕などが

あり、これらによって植物を育てる土壌が流出したり、塩分が地表に集積して、植物の生育が不可能になってしまう。簡単に言ってしまうと、沙漠とは水の足りない地域である。だから、沙漠の大規模な緑化はできない（地下水を汲み上げるとか、海水の淡水化等を行えば、技術的には植物を育てることはできるが、エネルギーや資源の消費をとまなう。

そのような事はやらない方が良く（私は思っている）緑化できないなんて!!! ショックと思われる方もあるかもしれない。でもご安心を！ 山西省は決して沙漠の地域ではありませんから。

その地域の元来の植生は気温や降水量からケッペンの指数  $K = P / 2 (T + 14)$ 、Pは降水量mm、Tは年平均気温、を計算すれば判断できる。渾源の気象データ（降水量424.6mm 年平均気温 6.2、標高1091.8mにおける測定）によればKは10.6となり、当然沙漠の地域（ $K < 5$ ）ではないが、だからといって広範囲に森林が成立可能な地域（ $K > 18$ ）でもない。草原に灌木が点在するような状態の植生（中国語では、稀樹灌木草原という）である。もっとも、これで判断できるのは地域の大まかな植生状況であるから、森林の成立が全く不可能ということではなく、川沿いや窪地など水が集まってくるところでは、森林が維持できる余地は残っている。

植生を決めるのは、温度や降水量だけではなく人間の影響も大きい。渾源県の集落周辺の山肌は低い草で覆われ、木は生えていない。これは、自然条件の結果ではなく、人間の影響の結果



放牧が環境を破壊するのはわかっているのだが.....

であると私は見る。時々、山肌を羊の群れがゆっくりと移動している。山に木がないのは、放牧地として利用されており、羊や山羊が樹木を食べ尽くし、再生力の強い草だけが残った結果である。樹木が生えたと日陰になって放牧に必要な草の成長量が少なくなるから、羊飼いが邪魔になる木をわざと取り除くこともある。家畜の放牧による羊毛や羊肉の生産は、この地域の経済活動の重要な一部分である。景色は一見荒涼としているけれども、それは、この土地が人の生活を支えている結果であると考えれば、単純に自然破壊と呼ぶのは、私にはちゅうちょされる。

よく見ると岩の崖などで、家畜が近寄れない場所には、灌木が茂っているのが確認できる。もし、山肌での放牧を止めることができれば、樹木が繁茂してきて、ことさら緑化を行わなくても灌木の林ぐらいいは成立するであろう。



大きな石がごろごろしている山腹



実は、雨に恵まれた日本でさえ、かつての里山は燃料や肥料用の落ち葉採取のために、ハゲ山であった。燃料や食料を外国に依存するようになった結果、山への負担が少なくなり、ようやく現在のように回復してきたのである。農地にせよ草地にせよ現地の土地は何らかの形で人間のための生産と結びついている。大規模に荒地地となって生産力がなくなってしまった土地は旅行中には見なかった（強いてそのようなものを探せば、恒山の麓の森林公園の予定地ぐらい。石ころだらけで地形が段々になっており、過去に恒山の中腹



この大地にも生産力はまだある

まで大規模な開墾が行われたことが読み取れる。黄土土地に刻まれた侵食谷の底も幅の広い所は、農地になっており、生産力は失われていない。水が集まってきて乾燥が防がれる谷底の農地の方が生産力が高く、集落も上段面よりも下段面に多い。この地域の農業的生産力の低さは、この地域の厳しい自然条件のためである（北緯39度、標高1,000mが日本の何処に相当するかをみれば、その厳しさがお分かりいただけよう）。技術的に生産効率を多少高めることはできるかも知れないが、あくまでも自然条件の制約付きである。

この地域における人間活動の古さを考慮するとき、生産力が失われていないのは非常な幸運であると思う。黄土の堆積層が厚く、多少の流失があっても容易に岩盤に達しなかったこと、表層の土壌流失と同時に表面に蓄積した塩類も洗い流されたことなどが幸いしたのかもしれない。

緑化の目的は、農業生産、薪燃料の生産、土壌流失の防

止、環境保全、野生生物の保護・回復など様々である。これらは、どれが重要でどれが不必要といったものではなく、一定の地域内に異なる目的を持つものが適地に依りて配置されることが理想である。もちろん緑化の目的に応じて植える植物の種類や管理、利用のしかたが異なってくる。やみくもに何でも（例えば外国産＝日本産の植物）植えればよいという訳ではない。この地域における最も貴重で、かつ地域の生産力を規定する資源は水である。緑化は一面でこの貴重な水を消費する（その結果として、水が人間や他の生物が必要とする食料などに転換されるのであるが）、貴重な資源を何にどの程度振り向けるかを決定するのはもちろんこの国の人びとであるが、われわれ外国人は、その決定に役立つ情報を提供し実行に協力することはできる。そのような意味で、ぜひもう一度訪れて、ポプラの木がどれだけの水を蒸散するかについて測定してみたいと思っている。

酒と煙草と酢に対する覚悟は既に出てきている。

## 山西省の自然

石原 忠一

(92年緑化協力団団長)

### (26) 沙棘(サージ)

渾源あたりの雨は7・8月が多く、年間400mm(大阪では1304mm〔管区気象台])で、年間蒸発量は1700mmの乾燥。-創めの天然の森を伐ってからの水土流出で貧弱な地味。-山羊や羊の過放牧。こんなきびしさに耐えて巧妙に生きる健気な灌木があります。

葉は柳の様に細く、裏面は銀灰色の鱗毛におおわれ、気孔からの蒸散をたくみに制限し、大地におろした地下部からは、根瘤バクテリアの共生で、痩せた土壌中でも、空中の窒素ガスを固定して有機物を合成し、小さな枝先は堅い鋭い刺となって、有蹄動物に食われるのを拒んでいます。

サージ ヒッポファエラムノイデスリンネ  
沙棘、*Hippophae rhamnoides* L. はまた醋柳とも酸刺とも呼ばれ、中国北部から中央アジア、南ヨーロッパにまで分布します。この仲間はユーラシア温帯から3種知られ、日本でおなじみの



サージの実子どもたちの格好のおやつ

ぐみ科にいれられています。

目立たない花が春に咲いて、異株。秋には刺の間に多数の濃橙色の果実をながい間つけ、小鳥たちの餌になって種子を撒布します。

あの岩だらけの山はだや、河岸の荒地などに前衛植物として張りつき、とにかく裸地を覆って太陽光線をうけとめ、根瘤菌のたすけもあって土壌を豊かにし、やがて多種類の植物をむかえて森林の復活への道をつないでくれそうです。

果実は食用になり、最近この果汁を混入した清涼飲料水が、瓶につめられ美しい橙色で魅力を発揮しています。それにしても、あの先の尖ったツマヨウジをいっぱいくっつけたような棘の中から果実をどのようにして摘みとるのでしょう。何だか私の指先まで痛いような気がします。

できました！  
ビデオ『黄土高原に緑を！』

黄土高原における緑化協力を記録したビデオ「黄土高原に緑を！」がこのたび完成しました。92年春からの活動をワーキングツアーを中心に28分に編集しました。20数時間のテープをそれだけにまとめたので、なかなか密度の濃いものになっています。

編集をプロの映像作家板坂靖彦さんにお願ひし、ナレーターはフリー・アナウンサーの橘統子さんです。日豊プロダクションの全面的な協力をえて、撮影はHi8ですが、編集をベータカムで行いましたので、たいへんきれいに仕上がりました。

95年の1月から本格的に普及にとりくみ、この緑化協力活動を広く知ってもらうために活用したいと思います。

編集をしていただいた板坂靖彦さんに、右の文章をいただきました。

**黄土高原に緑を！**

ビデオ作品・28分

定価 5,000円 会員価格 3,500円

郵送料 390円

事務所で貸出もおこなっています。  
制作にあたって地球環境基金の助成をうけました。

**編集後記**

なんだかずいぶん久しぶりの編集後記です。いつも文字でぎゅうぎゅうづめの紙面なので、今回はちょっとゆったりしてみました(つもり)。先月号の遅れと今月号の年末進行でここんとこずっと会報をつくってたような気分です。

カラーのリーフレットを作ったり、ビデオのステッカーの版下を作ったり、試行錯誤を繰り返してマックにもずいぶん慣れました。印刷屋さんにもマックが入ったのを機に今月号では写真の処理にも挑戦、できればいかがでしょうか。感想やご要望など、おたよりをいただけると嬉しいです。(東川)

**編集をさせてもらってありがとう**

映像作家 板坂 靖彦

私「この映像は、だれに、何を目的に？」高見邦雄さんは「……」とくに指示はありません。

「ハハア、好きなようにやってくださいであろう」と理解する。

「誰に、何のために」- 映画やビデオの制作を依頼された時に、まず確かめる作品の目的です。広告代理店やスポンサーからの注文で、映像をつくる場合、「この映像のターゲット(標的)は である」と指示があるのです。

「よし、指示がなければ、私の思いも入れる余地はある」とちょっと嬉しくなる。私はいま、作品づくりの中で、『事実を伝える。人を誘導しない』を追求しているからです。映像の怖さは、「何のために」が優先することです。マスコミのウソには、伝えたい事をわかりやすくする為の、いわゆるヤラセのウソと、伝えたくない事実を伝えない「言わないウソ」と大きく2種類が

あります。そして、この2種類のウソを使って、国民を戦争の泥沼に引きずり込んだのが、日本政府と軍隊でした。この伝統の手法は、今もあまり変わってないように思います。

編集と録音は、高見さんと一緒にやりましたが、その間の二人の合言葉は誇張しない素直な作品づくりでした。でも、本当に幸せなことに、どんなに抑制して創っても、映像から、輝きが消えることはありませんでした。

『緑の地球ネットワーク』のテーマ、地球環境のための国境をこえた民衆の協力に集まった、私利を微塵も感じさせない会員の奉仕のすがた・日中の人たちの暖かいこころの交流・そして、子どもたちの一生懸命の働きと、輝く瞳です。だから心から、価値ある作品を「編集をさせてもらってありがとう」なのです。

**私の本棚**

『地上から消えた動物』

ロバート・シルヴァーバーグ著

佐藤高子訳/ハヤカワ文庫 500円

「絶滅」を意味する言葉は、英語には2つあります。extinctionと、ex-terminationです。前者は死滅、すなわち恐竜やアンモナイトの絶滅をさし、後者は根絶、皆殺し-すなわちドーロ鳥やモア、そして近い将来、日本のトキがその犠牲者のリストにくわわるでしょう。

トキの学名は、ニッポニア・ニッポンといえます。ごく最近までありふれた存在だったこの鳥は、現在日本には2羽しか残っていません。国外では中国にごく少数生き残っているのが確認されています。これらも、繁殖地でこそ手厚く保護されていますが、繁殖地を離れる時期は保護も充分ではないといえます。

数十羽生き残っていれば大丈夫でしょうって？ いいえ、2000羽生き残っていて、手厚く保護されていてもわず

か16年で絶滅してしまった種があることを、この『地上から消えた動物』は教えてくれます。

人間のもつ他者を滅ぼす力というのは、全くいやになるほどです。なにしろ、北米に何十億、何百億いたとされ、大群が飛ぶときには何時間にも渡って空が真暗になり、オーデュボンをして「この鳥を衰退させるのは森林の縮小以外ない」といわせたりヨコウバトを、1世紀の間に絶滅においやってしまったのですから。

全く無自覚に多くの種を絶滅させてしまった過去1~2世紀の人びととは違い、私たちはいま「絶滅の危機」の自覚をもって多くの稀少種の生存を危うくしています。そして、野生のトキの生存を許さない環境は、私たち人間にとっても住みづらいものはずです。

ユーモラスなドーロ、美しいリヨコウバト、巨大なステラーカイギュウ。もう、生きている彼らを見ることは私たちにできません。未来の子どもたちに剥製でないパンダを、サイを残すのは、私たちの役目です。